



Vol.4 (2)&(3)合併号 2023.11.13.

(発行)NPO 大学院連合

メンタルヘルスセンター

540-0012 大阪市中央区谷町1丁目6-4

天満橋八千代ビル10階 DE号

Tel.06-6755-4458 Fax. 06-6755-4459

巻頭言

一言論封殺の歴史一

代表理事 三戸 秀樹

1. はじめに

さまざまな側面からみて、近年の社会的状況が第二次世界大戦へ向かっていった前夜状況に酷似してきているとの指摘が出ている。2022年2月24日に勃発したロシアのウクライナ侵攻しかりである。

国の経済状態、特定秘密保護法、共謀罪の趣旨を盛り込んだ改正組織犯罪処罰法の施行、家庭教育法案、教科書記載に対する内閣からの干渉、海外派兵への基準変更にはじまり、憲法第九条を無視した自衛隊解釈の大幅変更などなど…。この状況下において、安倍晋三・元首相への銃撃事件が2022年7月8日におきて、安倍氏は帰らぬ人となった。2023年4月15日には岸田文雄・首相もパイプ爆弾の洗礼を受けることとなった。この問答無用の殺人事件ないしは殺人未遂事件は、戦前は頻々として起きた。このような状況下、いよいよ次の戦争にはいる直前状態と位置づけ、“戦前”とまで表現した人も現れはじめた。

2. 戦前の状況

原敬・首相が1921年11月4日、東京駅構内で駅員によって刺殺された。東京駅コンコースには、その殺害場所に真鍮の印が埋め込まれている。東京開催の学会出張の折に見に行ったことを思い出す。山本宣治は東京帝国大学理学部や京都帝国大学大学院で学んだ生物学者だ。そして京都大学や同志社大学で教鞭をとっていたクリスチャンであった。衆議院議員の折りに治安維持法改正に反対して、1929年(昭和4年)3月5日に右翼の男によって刺殺され、39歳の若さで生涯を閉じた。大隈重信邸住み込み書生もしていた人で、大隈自身も1889年(明治22年)に爆弾で右脚を失った。現在、京都府宇治市の料理旅館「花やしき浮舟堂」に山本の自宅が残されており、山本の書斎も見ることが出来る。過去に数度、花やしき浮舟堂を訪れて昼食をとり、墓参りをしたことがある。また彼は、大阪労働学校の講師もしていた人でもある(参照：MHC会報 Vol.2(2)pp.4,2021.)。昭和初期には政治家を狙ったテロが頻発した。1930年(昭和5年)11月14日に、浜口雄幸・元首相が東京駅において右翼の青年に狙撃され重傷を負い、翌年8月26日に亡くなった。2年後1932年2月9日、日銀総裁や蔵相を歴任した井上準之助が暗殺された。

そして同じ1932年5月15日には、犬養毅・元首相が海軍の青年将校たちによって射殺され、政党政治を終わらせたイメージが強く伝わる。しかしこの時の計画に、東京都内の変電所を同時襲撃をして東京を暗黒にすることが立案されていた。それは、茨城県水戸郊外の農本主義者・橋孝三郎が主宰する愛郷塾で計画された。そして塾生たちが変電所を襲撃した。茨城県側から見る東京の豊かさに対するメッセージでもあった。言葉をかえると経済的格差から発生した大きな不満の発現であった。当時は、世界恐慌の影響をうけ国内経済が悪化し、財界が富を独占し、庶民の不満は高まっていた。

犬養毅・元首相や高橋是清・元蔵相などを殺害した海軍や陸軍の青年将校たちの動きは、意に沿わなければ抹殺するというテロ行為であった。犬養は「話せばわかる」と言ったが、これ

への応答はなく、問答無用であった。

戦中に治安維持法によって逮捕された哲学者・三木清は戦後も獄中にいた。1945年8月終戦をむかえても、なお獄中に据え置かれ、米国占領下1945年9月26日に豊多摩拘置所で獄死した。48歳だった。三木哲学の著書「人生ノート」は戦後も読み継がれ、新潮社文庫版は116刷りで220万部の発行を記録している。1945年7月ポツダム宣言の戦争終結条件の「民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし」の障礙に、治安維持法は相当するが政府は同法を廃止しなかったのだ。

3. 戦後の状況

戦後の動きにおいては、右翼の人たちが意に沿わない政治家を次々と襲った。浅沼稻次郎、岸信介・元首相、本島等・長崎市長、金丸信・自民党総裁、細川護熙・元首相・銃撃、伊藤一長・長崎市長など、多くの事例があがる。

表. 言論を封殺しようとした歴史年表

—テロ・銃撃・刺殺・傷害等の事件—

年	対 象	関与者・機関・(脚注)
1889(明 22)	大隈重信・爆弾	来島恒喜
1909(明 42)	伊藤博文・元首相・暗殺	独立運動家・安重根
1910(明 43)	幸徳秋水事件・大逆事件 秋水、大石誠之助ほか合計 12 人死刑 5 人獄死	(政治的弾圧事件) (大石・新宮市名誉市民に)
1918(大 7)	朝日新聞白虹(言論弾圧)事件	右翼・黒龍会
1921(大 10)	安田善次郎・実業家・刺殺	朝日平吾(自称:神州義団)
1921(大 10)	原敬・首相・刺殺	大塚駅員
1923(大 12)	大杉榮・伊藤野枝・橘宗一の扼殺	甘粕正彦ら(憲兵隊員)
1928(昭 3)	日本共産党ら 3・15 事件(300 人検挙)	警察(治安維持法)
1929(昭 4)	山本宣治・元教授・代議士・刺殺	黒田保久二(右翼団体・七生義団)
1930(昭 5)	浜口雄幸・首相・銃撃	右翼の男
1932(昭 7)	井上準之助・日銀総裁・蔵相・暗殺	右翼・血盟団
1932(昭 7)	犬養毅・首相 5・15 事件	海軍・青年将校ら(世界恐慌)
1936(昭 11)	高橋是清・蔵相ら 2・26 事件	陸軍・青年将校
1942(昭 17)	横浜事件(編集者・新聞記者 60 余人)	警察(治安維持法)
~1945(昭 20)	30 人有罪・2 人獄死	
1945(昭 20)	三木清・法政大教授・獄死	検事勾留処分(たつの市名誉市民に)

1960(昭 35)	浅沼稻次郎・社会党委員長・刺殺	右翼の青年
1960(昭 35)	岸信介首相・刺傷	右翼の男

1990(平 2)	本島等・長崎市長・銃撃	右翼団体幹部
1992(平 4)	金丸信・自民党副総裁・銃撃	右翼の男
1994(平 6)	細川護熙・元首相・銃撃	右翼の男

2007 年(平 19)	伊藤一長・長崎市長・射殺	右翼の男
2022 年(令 4)	安倍晋三・元首相・射殺	山上徹也

「言論封殺が戦争への道をひらく」ことを思い知っている昨今、36 年前の 1987 年 5 月 3 日に起きた朝日新聞阪神支局襲撃事件を思い出す。赤報隊と称する犯人は、朝日新聞へ戦前の翼賛体制への回帰を要求し、中曽根・元首相の靖国神社参拝中止を裏切りと称し、竹下・元首相へ参拝要求を出し、否の場合は処刑リストにいれろと迫った。朝日新聞は 1879 年(明治 12 年)創業の老舗の新聞社であるが、この種の朝日新聞社への言論圧力は、1918 年(大正 7 年)の白虹事件が象徴的である。その後、太平洋戦争中の朝日新聞は「勝った勝った、また勝った」と偽りの戦況情報を流し続けた。

4. 最近の状況

安倍晋三・元首相が 2022 年 7 月 8 日に奈良県奈良市で参議院選挙の街頭演説中に自作銃で狙撃されて亡くなった。加えて翌 2023 年 4 月 15 日には、和歌山市雑賀崎漁港において選挙の街頭演説をする岸田首相へ、私製の爆弾が投げ込まれた。

表現・言論の自由に関連する近年の動きでは、① 2016 年：放送局が政治的公平性を欠く放送を繰り返したと判断した場合、電波停止を命じる可能性に総務相が言及、② 2017 年：犯罪の計画段階で処罰する「共謀罪」の趣旨を盛り込んだ改正組織犯罪処罰法の施行が挙げられよう。

(追記)

MHC 会報 Vol.2(3)の巻頭言「杞憂にすぎなければ良いのだが」に、清酒“太平洋”についてのくだりを載せた。ここでは、医師・大石誠之助が身に覚えのない過剰嫌疑で特高警察によって 1911 年 1 月 24 日に殺された事案について触れた。

(文責：三戸秀樹)

社会が病気を作った視点に立つ心理学 —歴史的なうごきを整理すると—

1. 医学系の動きに対比して

労働現場で起きているメンタルダウンについて、心理臨床家たちや産業カウンセラーの多くの人たちは、労働者の個人的ストレス解消法や労働現場における人間関係の取り方に終始していることがほとんどである。また、産業ストレスに関する学会発表でも、労働社会に原因を求め改善策を発表するものはほとんどない。すなわち、労働社会に原因を求めるのではなく、労働者個人の側の要因に関する対処・改善へ終始している。

しかし医学分野においては社会医学会という学会があり、社会医学とは、生物としての人間のみだけでなく、社会的存在としての人間を重視した研究や、診療を行っている。つまり、研究対象は常に集団で、諸種の社会階級・階層について、特殊な生活状況と健康状態との関連を検討し、とくに勤労者階層の健康の維持・増進・修復を、医学的および社会的に図ろうとする医学研究分野である。研究の具体的内容は、公衆衛生学・産業医学(労働医学)・農村医学・予防医学などからのものが多い。また、これらに基づいた社会医療運動なども研究範囲に含められていることがある。

日本社会医学研究会は、1959 年に社会医学研究会の準備会が発足し、第 1 回の研究会を翌 1960 年に開催している。毎年 1 回の年次研究会開催を経て 1999 年に最後の社会医学研究会を終え、以降は名称を社会医学会に変更した。ちなみに筆者は、2010 年に第 51 回社会医学会総会を関西福祉科学大学において開催をしたことがある。

しかし心理学系研究者の多くは、労働者個人の対応や対処法に解決を求め、労働者が所属する労働社会・企業社会や地域社会などに原因を求める心理系研究者を寡聞にして知らない。

2. 歴史的な過去の動き

倉敷紡績の大原孫三郎は、東京で放蕩生活をして大借金をして倉敷へもどった。孫三郎の父

・孝四郎は、息子の善導を同郷のクリスチャン・林源十郎に依頼した。林源十郎は孫三郎の世話をしながら、孤児の世話をしている石井十次（1865～1914）を紹介した。大原は石井のスポンサーとなり、本格的援助をすることになった。このあたりの出来事は、現在、インディーズ系映画「石井のおとうさんありがとう」にもなっている。石井の活動は、孤児の面倒をみているうちに、貧困を断ち切るため、孤児をして手に職をもたせる就労課題へと行き着いた。そして孤児の貧困問題は、労働問題へとつながった。石井の死後、1917年（大正6年）に大原孫三郎が岡山孤児院大阪事務所を拡張し、財団法人石井記念大阪愛染園を設立した。愛染橋保育所と愛染橋夜学校の事業を引き継いだほか、救済事業研究室を付設した。これが大原社会問題研究所のスタートとなった。

社会的状況は、1918年（大正7年）に富山で米騒動が起きた。原因は激しい貧富の差をともなった貧乏問題で、「米よこせ」運動となった。この動きは野火のごとく全国波及をし、当時の神戸にあった大きな商社・鈴木商店は焼き打ちによって倒産した。そして、寺内正毅内閣は総辞職となった。

1919年に大阪市南区下寺町の石井記念愛染園に大原社会問題研究所を設立した。2020年7月に天王寺区伶人町の新事務所へ移転した。設立当初は①社会問題・社会科学と②労働科学の2部門を置いたが、後者は1921年に倉敷労働科学研究所として独立した。この倉敷労働科学研究所に心理学者の桐原保見がいた。彼がわが国の産業心理学の先鞭を切った。さらに倉敷労働科学研究所を閉鎖して、1986年に後継する労働科学研究所を東京に設立した。この労働科学研究の一環に、労働と精神疾患発症についての言及があった。研究員・小沼十寸穂による研究で、『職場不応と不応症—産業神経症の問題へ』1971年（昭和46年）、『職場の精神健康管理の実際』1981年（昭和56年）、『労働精神医学の新知見—利き眼・喋り作業・拘束性神経症』1981年（昭和56年）、『産業神経症物語』1984年（昭和59年）などである。小沼は、労働科学研究所から広島大学・医学部・精神科教室へ異動した。ちなみに、日本産業衛生学会は労働科学研究所の初代所長・暉峻義等^{てるおかぎとつ}によって創設され、その学会下部の研究会として職場不応研究会在が創設された。これらの小沼の一連研究に言及する現在の産業系心理臨床の研究者をほとんど知らない。

働く人々における新しいメンタルヘルス事案として、“新型うつ病”という呼称を聞かれたことがないだろうか。新しい精神科疾患として紹介されているが、従前とは異なるうつ病として区分されている。現代の労働社会が生んだ新しい産業系の精神疾患であるとも言うべきか…。新型うつ病、あるいは、現代型うつ病とは、従来からの典型的なうつ病とは異なる特徴を持つものの総称である。そして、正式な用語でもないが一人歩きをしているが、労働社会がつくった新しい病像を表しているのではないだろうか。

3. 心理学における社会起因性疾病の研究

「社会がメンタルヘルス問題を作っている」視点が大きく欠けている。会社組織は人の集まりで、それはあたかも森のような組織である。一本の木が一人の社員で、会社はその集合体の森である。メンタルダウンした社員（一本の木）を取りだして対処や治療をしようとしている。しかし問題が時には、その一人の社員にあるのではなくて、所属する会社組織に問題を含有していることがあるのだ。労働社会や非労働社会のなかで、発生しているメンタル問題の多くに、その所属社会がかかわっていることは、早く気づくべきではないだろうか。

医学における社会医学と言う研究分野を対比させて考えると、文言比較では、心理学における“社会心理学”となる。しかし、現行の社会心理学研究では、社会が人々をしてメンタルダウンさせている視点に立つ研究発表はほとんど無きに等しいと思料する。

（備考）

社会福祉学では、社会と個人を相対化させ、ときに社会的弱者という表現をしてきた。しかしこの社会福祉学においても、“会社という社会”と“個人”を相対化させてみて、そこに過労死や過労自殺の社員が存在しているとは見ていないのだろう。したがって“会

社弱者”という言葉は社会福祉学からいまだに出現してこない。

東邦大学・看護学部の藤原和美教授から、社会医学会誌の初巻からのバックナンバー寄贈を今夏に受けました。社会が病気をつくっている視点の論文を紐解き、心理学分野で役立てて下さい。

本文中の林源十郎は、筆者の祖母・林あさの父親で、筆者の曾祖父にあたる。

(文責：三戸秀樹)

心理学からの予防対策 —疫学的研究手法の応用—

1. メンタルヘルス事案の現状

過労死という言葉は、1982年発行の細川汀・田尻俊一郎・上畑鉄之丞たちが書いた著書「過労死・脳血管疾患の業務上認定と予防」(労働経済社)以来とされることが多い。故・細川先生からは直接、「私が過労死という言葉を作った」と何度も聞いた。その後、大阪過労死問題連絡会によって1988年に過労死110番が開設された。過労死の言葉が出来て以来40余年が経過しているが、大きく改善を感じることが出来ない。さらに過労自殺という言葉は、弁護士・川上博が「過労自殺」という岩波新書を1998年に著して以来、過労自殺という呼称が一般化をしていった。過労死・過労自殺として、国はひとくくりにした「過労死等防止対策推進法」を2014年施行した。

わが国の自殺数の年次推移が1998年に前年度から一気に1万人ほど上昇し、なかなか顕著に低下しない状態となった。この上昇のなかにあっても研究的動きがほとんど出なかったため、上畑鉄之丞先生たちと一緒に研究を開始し、2002年に「地域における自殺防止と自殺防止支援に関する研究」と題する報告書を出した。予算が無かったため、国立公衆衛生院(現：国立保健医療科学院)の研究費を使わせていただいた。従前の自殺原因に関する区分からは、労働起因性のみをさぐるのが困難であったが、この一連研究からは、やはり働きの絡みで上昇の動きを感じることが出来た。働く人々におけるメンタルヘルス事案、加えて現在は、労働の場におけるハラスメント事案がとまらない状況にあるとみた。

しかしながら、いまだに奥深いところに隠れている真の原因が分からないまま、この現象的対処に終始し、右往左往している状態に近いのではないだろうか。現にMHCは、カウンセリング・心理相談等をカウンセラー派遣をして実施している。しかし、クライアントが再発や再度のメンタルダウンを繰り返している現実、なんら根本的な原因対応につながっていないことを示す証左ではないだろうか。なかには、短期間のうちに100回を優に越すカウンセリングを実施し、そのカウンセリング回数を疑問もなく報告するカウンセラーがいる。予防的対策へ繋げることが出来なくて、現象的対応に終始していることを如実にあらわしているのである。

病気の原因が明確に分からなくても予防策を構築することが出来た過去の歴史がある。心理学も、この手法から学ぶことが出来るはずだ。

2. 高木兼寛(1849-1920年)による実証的研究

わが国における疫学的研究の最初の実証的研究は、高木の航海実験であるとされている。明治時代に、海軍から英国セント・トーマス医学校へ留学をして、高い成績履歴を残しながら5年後1880年に帰国をし、英国流の海軍医学を導入した。日露戦争(1904～1905年)の戦病死者総数37,200人のうち、脚気による死亡者は27,800人であった。戦死者よりも脚気による病死者の方が実は多かったのである。高木は麦飯の有効性に注目し、男爵位が授けられた折に麦飯男爵とも称された。海軍での最終階級は軍医総監であった。脚気撲滅に尽力し、日本のビタミンの父とも称された。当時の医学界におけるドイツ医学一辺倒の学理優先、研究第一の状況を憂慮し、臨床第一の英国医学と患者中心の医療啓発につとめた。この流れから、昭憲皇太后から「慈恵」の言葉をもらって、東京慈恵会医科大学、東京慈恵会医科大学付属病院、慈恵

会看護専門学校の創設を行った。わが国最初の私立医科大学である。

高木は、1882年、また軍艦「竜城」「筑波」の長期にわたる航海実験結果を示して兵食改善を訴えた。最初の航海実験は、軍艦・竜城がニュージーランド、ホノルル、南米をめぐる272日の航海から帰国したときに、乗組員の277人のうち25人が死亡し、169人が麻痺症状を経験した。この原因が精米食にあるのではないかと考えた。このため、肉類、ミルク、野菜類を豊富に取り入れた食の改善をおこなって、次回、軍艦・筑波で同人数の航海をさせ、287日間の航海後、1人として死者を出さなかった。また脚気にかかったものは14人のみであった。なおこの14人は古い食習慣を頑なに固執して、肉類、ミルク、野菜類を食べなかった人たちであった（豊川裕之、1974）。この実証的研究は、わが国における疫学研究の最初のものと言われている。当時の研究は、1910年代のビタミン不足が原因と判明する後年の時からさかのぼること、およそ30年ほど前のことである。なお、大正時代における脚気は、結核とならんだ二大国民病でもあった。大正12年（1923年）には、死者26,796人の記録残しており、大正末期には0～4歳の乳幼児死亡の約半数は脚気死亡であった。これを契機とした海軍の兵食改善は、洋食+麦飯のメニューによって脚気を激減させた。

高木は日本の疫学の父とも称される。ちなみに疫学研究史は、英国における疫学の祖と言われるジョン・スノウによるコレラ研究に関する1854年のロンドン・ブロード街における調査研究が有名だ。感染源→感染経路の調査研究から、空気感染説であったものを経口感染へと導いた。これは、病原体のコレラ菌が発見される30年ほど前のことであった。高木が英国留学において疫学研究を学んできた可能性は濃厚で、後年、英国南極地名委員会によって高木の脚気対策が評価され、南極大陸の岬にTakaki Promontory（高木岬）と死後の1952年に命名されている。当時、海外での高木の脚気対策評価は高く、日露戦争のあと米国コロンビア大学からの招請状が届き、「日露戦争の軍陣衛生」について講演をした。その足で英国へ渡り、母校のセント・トーマス医学校で講演をし、喝采を受けたと言われる。当時の高木の脚気対策は、脚気原因の真の原因であるビタミンB1欠乏が判明されるよりもはるか以前のことであった。

すなわち疫学的研究は、真の原因が科学的に究明される以前に、具体的な対策を講じることが出来る研究的手法であると位置づけることが出来る。

3. 疫学的研究手法の心理学への応用：“主人公化”心理

戦後の人々の新しい行動は、ライフスタイルも一変させることとなった。この行動変化に対する説明として、“際崩れ”“ボーダーレス”“価値の多様化”“不確実性の時代”などが使われた。しかしこの説明概念は、事後説明的特徴を有しており、すべてあと出しの説明概念である。次にどのような行動傾向が出現するのかが皆目説明が出来ないのだ。先が分からなければ防止対策は作ることが出来ない。行動から出て来る不都合さへの予防的対策はお手上げ状態になるが、はたしてそれで良いのだろうか。

一昔前には、放送局のアナウンサーがマイクをもって、一般の人々へ意見や感想を求めようとすると、人々は蜘蛛の子を散らすごとく逃げてしまった。しかし現在はどうかであろうか。人々が最初に語る、「えー、まあそうですね」の枕詞は気になるが、いっばし風の事を語ったり、テレビで語られているのと同じ解説を繰り返している。実は「えー、まあそうですね」の語り始めは、「皆さんもそう思っているのですが、私も…」と言う枕言葉なのである。このような人々の新しい“こころ”の共通変化を読み取る法則性を見つけることこそが、実は予防策創出には重要となる。

疫学研究手法の詳細は割愛するが、予言力をもった説明概念、ないしは法則性を以下のように導き出すことが出来るので紹介をする。次表には、場・関係として、従来型関係では左側が弱い立場、その対である右側が強い立場のものを表記した。そして、その二者の相互関係における今日的関係で、発生している諸々の問題点を項目として列記した。この結果、かつての弱かった立場の者たちが主張や異論をとえ始めていることに気づくだろう。そして“主人公化

”心理を次のように定義をした。「激動の社会変化を背景に、精神的よりどころを失い、他律的存在から、自立的存在にならざるを得ない事態に追い込まれて、自分を前面に押し出さざるを得なくなった心理・精神的動き」である。

表. さまざまな場や関係における主人公化の現象

場・関係	項目
労働者……………企業	知る権利、安全データシート(SDS)、特許帰属の問題、過労死の運動展開、ワーキングネーム、ダイバーシティー、A l l y (野村證券)、「N女の研究」出版、
患者……………医者	説明と同意、尊厳死、ガンの告知、薬に関する情報、患者さま、医師不足、セカンドオピニオン、コンビニ受診、看護師の転職、歯科技工士の転職、
障害者……………健常者	医師へ支払った製薬会社の講演料・原稿料公開、診療指針作りへ患者参加、「患者の権利法」の検討、
老人……………若者	交通権、移動権、雇用機会の要求(法定雇用率の上昇)、
女性……………男性	障害者差別解消法、インクルーシブ教育、
子ども……………大人	ノーマライゼーション、
児童・生徒・学生……………教師	セクハラ、男女雇用機会均等法、LGBT、LGBTQ+、LGBT理解増進法、パートナーシップ証明書、自分の心地よい性が自分の性、
株主……………会社	子どもの権利法、
消費・生活者……………メーカー	教育情報の開示、内申書の開示、評価方法批判、元号・西暦表示、入学金・授業料返還請求、校則の見直し、PTA・保護者会の入退会自由、
住民……………企業	日本PTA全国協議会からの退会する各校PTA、
住民……………行政・司法	同時開催の株主総会、すぐ終わる株主総会、
	消費者運動、PL法、食品添加物表示、賞味期間の明示、生産地表示、リコール制度、嫌煙権、
	ダムの建設、護岸建設、公害訴訟、原子力発電所建設、
	入会の海浜の埋立や山林のゴルフ場化の問題視、
	企業の社会貢献、
	NGO、NPO、経理公開、オンブスマン、裁判員裁判、
	被害者参加制度、教育長・教育委員の公募、
	公務員の入れ墨問題、県議政務活動費問題、
	議員事務員・給与支払報告書の提出義務化、
	議会基本条例の制定、文書通信交通滞在費への問題視、
	再婚禁止期間100日に、地区連合自治会への不参加地域、
	夫婦別姓訴訟、

4. 医学や臨床心理学の究極的目的地は予防

近代日本医学の父と称される北里柴三郎(1853-1931)は、1886-1892年にドイツへ国費留学をして、病原微生物学の父・ロベルト・コッホに学んだ。コッホは、炭疽菌、結核菌、コレラ菌

などを発見した人である。そして北里は、1889年に破傷風菌の純粋培養に成功し、1890年に血清療法を開発した。帰国後1892年には、私立伝染病研究所（医科学研究所）を創設した。そして、1894年にペスト菌を発見した。数多くの業績を残した伝染病研究所は、ドイツのコッホの伝染病研究所、フランスのパスツール研究所、とともに世界三大研究所と称される。

この北里こそが、「病気を未然に防ぐことが医者使命」「医の基本は予防にある」などと終始主張をした。さて心理臨床研究分野において、予防につながる研究が、大学で研究所で現在どれほど真剣に行われているのだろうか。北里の言葉を借りるなら、「メンタル不調を未然に防ぐことこそが、心理臨床家の使命なのだ」と指摘されるのではないだろうか…。心理臨床の専門性を有する人々が、メンタル不調者の心理相談ばかりに終始して、また新たに心理臨床分野へ入ってくる若い人たちも、同様なおもむきの人たちの再生産になっていることが大変気がかりである。

【参考図書】

- 豊川裕之 1974 第3節食習慣, 細谷憲政、鈴木継美、手塚朋通(編著) 公衆栄養学, 東京: 第一出版, pp.125-126.
- 三戸秀樹 1993 ストレスと家庭—家庭とストレス耐性—, 八田武志、三戸秀樹他, ストレスとつきあう法: 心理学からのアドバイス, 有斐閣(東京), pp.165-181.
- 三戸秀樹 1996 感情、表情そして身体表現, 宮田洋(編) 現代心理学シリーズ2 脳と心, 培風館(東京) pp63-70, .
- 三戸秀樹 1998 第9章労働起因性健康障害・災害の生理心理学的評価, 新・生理心理学第3巻 新しい生理心理学の展望, 北大路出版(京都) pp.104-115.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(3): 産業ストレスと増大の現状(その2), 危険物新聞, 736:5-7.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(4): 「主人公になりたい私」の“ころ”とは, 危険物新聞, 737:9-10.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(4続): 「主人公になりたい私」の“ころ”とは, 危険物新聞, 738:11-12.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(5): 主人公化と事業所対応の現状, 危険物新聞, 739:13-14.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(5続): 主人公化と事業所対応の現状, 危険物新聞, 740:15-16.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(6): 主人公化と新しい制度の対応, 危険物新聞, 741:17-18.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(6続): 主人公化と新しい制度の対応, 危険物新聞, 742:19-20.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(7): 主人公化時代の“自助”“互助”“公助”, 危険物新聞, 743:21-22.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(8): 主人公化はいつごろ出現したか, 危険物新聞, 744:23-24.
- 三戸秀樹 2016 ストレスと事故・不安全応答の関係(9): 主人公化と家庭の外化の関係: セルフケア機能の喪失, 危険物新聞, 745:25-26.
- 三戸秀樹 2015 ストレスと事故・不安全応答の関係(10): 主人公化と家庭の外化の関係: いやし機能がある距離環境, 危険物新聞, 746:27-28.

(文責: 三戸秀樹)

産業安全のこぼし(9)

—続・石綿について—

まだ起こる石綿肺

Vol.3(3)に、「石綿について」を記した。今回はその続編となる。前報では、石綿に関するクボタショックと石綿紡績に関する歴史についてと、記録・記憶から取り残されてしまいそうなパート・アルバイト作業における石綿取り扱い事案について言及した。そして、明治45年(1912年)に大阪府泉州に多くの石綿紡績工場が作られたことも記した。しかし、労働の「働」の漢字が世に現れた明治中期の横山源之助が書いた書物「内地雑居後日本」は、明治32年(1899年)に発行されている。ここには、石綿を暑かった大阪の工場に関する記録が残されているのだ。おそらく防護のマスクもしないで作業することが一般的だったに相違ないだろう。1899年から124年経っている。この労働者たちは、呼吸困難をとめないながら天寿を全うするこ

となく亡くなっていったのではないだろうか…。

尼崎労働者安全センターが中心になって、クボタによる石綿被害について取り組んでおられる。ここにおける石綿被害に関する「アスベスト患者と家族の会」の活動誌である「未来と安心」第15号には、大学の学費を稼ぐために1964年の春・夏・冬の大学休暇に、学生アルバイトとして下水道工事会社に行かれていた方のケースが紹介されていた。そこでの作業は、石綿管の切断・研磨・バーリング（面取り）をされていたそうである。その折には、白い粉末が舞うなかでの作業であったと記されていた。その後57年後の2021年12月に、この人に中皮腫が発見された。水道管においても多くの石綿管が使われてきた歴史がある。今後の石綿肺患者の発見の中に少なからずのこの種の取り扱い履歴を有する労働者が含まれることがとても心配だ。

【参考図書】

清水正巳 2023 同じ内容、驚くほど症状が似ていました。未来と安心、15号 1-2.

（文責：三戸秀樹）

ニュース

- 大学入学して学部＋修士課程を合わせて6年間を勉強して、公認心理師国家試験を受験する。この公認心理師試験は、覚える量が多いと聞かされる。しかし、本当にそうであろうか。同様に6年間の勉学期間後、受験する医師国家試験の出題基準項目は1600項目である。他方、公認心理師試験の出題基準・小項目は約600項目である。覚える量の少ない国家試験に位置づけられる。医学部教育は、学年制をとっている大学も少なからずある。心理学系の大学教育は単位制である。医学部における学年制というのは、当該学年で受けた全科目が合格しないと、進級することが出来ない進学制度である。1科目でも不合格であれば、留年して再度その学年の勉強をする。加えて、最期の6年次に、6年間に受けた科目について卒業試験を課している医学部もある。卒業するためには、全科目の合格点をとることが必要だ。
- インボイス（適格請求書）制度の導入が10月1日から始まった。正確な消費税額を把握することで適正な申告と納税を行うことが出来る制度である。登録番号は、国税庁WEBサイト「適格請求書発行事業者公表サイト」から確認できる。
- 10月16日に健保連大阪の研修会が大阪赤十字会館（大阪市大手前2丁目）で開催され、講師派遣致しました。有光興記先生に「仕事に生かすマインドフルネスの考え方と実践」について御講演いただきました。受講者のなかには、ダイハツ工業(株)・安全健康推進室のスモール志帆さんがおられました。彼女は、関西福祉科学大学の大学院（長見ゼミ）の御出身です。

事務局だより

- オフィスの賃料値上げの通告がありました。交渉を重ねながら、申し入れ賃貸料の値引きをしてもらいました。
- MHCのホームページ（www.mental-health-center.jp）を開く際に、右のQRコードを活用下さい。



編集後記

- 編集委員長のコロナ罹患は、肺炎の併発が重なり、完治までに約2ヶ月足らずを要してしまいました。このため、会報の第2号発刊が遅れ、さらに第3号発刊遅れ影響に鑑みて、合併号発刊となってしまいました。申し訳ございません。次号 Vol.4(4)では、発刊遅滞を取り戻したいと念じております。
- 「産業安全のこばなし」シリーズでは、人間行動に関する安全の問題や、企業活動に含まれ

る広範囲な安全問題についても言及をし、時には公害問題へつながった課題についても触れてきた。これから起きようとしている課題の一つに、有機フッ素化合物（総称 PFAS、ピーファーズ）汚染の問題がある。すでに沖縄の米軍基地では、この PFAS 汚染が伝えられているが、米軍基地との関連という特異な条件下の課題だけに留まらないで、もっと広範囲に危惧すべき課題である。東京都国分寺市の浄水所において、2019 年に高い数値の PFOS と PFOA を検出した。これを機に東京・多摩地域では、市民団体による住民の血中濃度調査が始まり、調査結果を 2023 年 6 月 8 日に公表された。全国平均の約 2.4 倍の汚染状態であった。

現状研究では、PFAS と潰瘍性大腸炎、高コレステロール、脂質異常、ワクチン免疫力低下、男女の不妊症、ホルモン異常、肥満、喘息などの因果関係が言及されている。

折りしも、PFAS 汚染に関する図書である R. ビロット著「毒の水」という本が 2023 年 4 月に翻訳出版された。世界的大企業デュポンによる PFAS の垂れ流しによる健康被害について、18 年間の戦いについて記述されている。そして身近な有機フッ素化合物として思い出されるのは、テフロン加工のフライパンである。

本会報では、「労働心理のあれこれ」はお休みですが、実は、労働心理に関する記事「社会が病気を作った視点に立つ心理学－歴史的なうごきを整理すると－」を予定していました。しかし内容のボリュームがおおきくなってしまい、独立させました。

（編集子）